

対話

音楽◎人間◎教育

インタビュー：構成 ● 中嶋恒雄 山梨大学助教授・作曲・指揮
写真 ● 竹原伸治

12

仏教でね、悟りと迷いというだろう。悟りはわかり方に関して深さがある。けど、人間は悟りつつ迷い、迷いつつ悟っているんだ。迷いの面というのは人間の生成発展の面なんだ。

本連載も早いもので1年を経過し、作曲家の佐藤慶次郎氏を訪問して締めくくりとすることになった。誌上を借りて読者諸兄姉に謝意を表したいと思う。

佐藤慶次郎氏について、読者は如何なるように存じておられることであろうか。膨大なピアノのレパートリーにまったく新しい響きの概念を加えたと米国の批評家ヒューエル・タークイを驚嘆させた、あの「ピアノのためのカリグラフィ」の作曲者としてであろうか。それとも七〇年万国博三井館における音

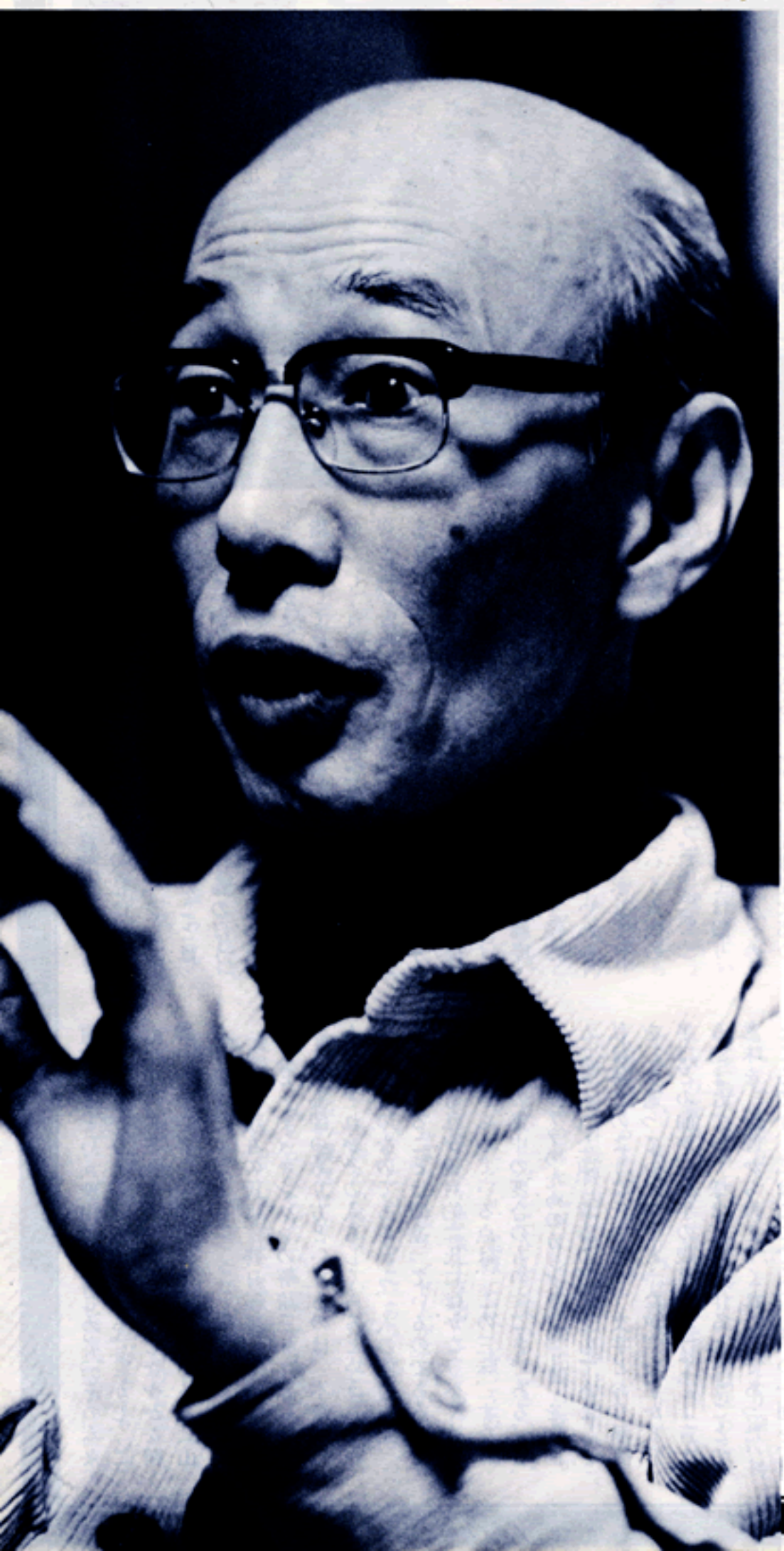
響デザイナーとしてであろうか。それとも銀座4丁目ソニービルや和光シヨールム、はたまた大手町電気通信科学館などに展示されたさまざまなエレクトロニク・モビールの作者としてであろうか。それとも全く御存知ないであろうか。秋山邦晴は氏について次のように評している。「佐藤慶次郎は現代の音の仙人といふべきか。かれはいつもわれわれ下界の俗人のまえから姿を隠しているかのようだ。そしてかれがいま何処で、何をしているのかは、まったく得休しれずなのである。か

■佐藤慶次郎=1927年 東京生れ
1952年慶応義塾大学医学部卒業、
在学中より早坂文雄氏に作曲を師事。
1953年実験工房会員（後に脱会）、
1961年「ピアノのためのカリグラフィ」が第35回世界音楽祭（ISCM, ウィーン）入選。
来日したジョン・ケージに触発を受け、
以後拡大された音概念による世界を追究する。電子楽器による「エレクトロニック・ラーガ」、
万国博三井グループ館の音響デザイン等の仕事がある。

佐藤

SATO KEIJIRO

慶次郎



れがわれわれのまえに姿を現わすのは、かれが新しい創造物を手にして出現するときだ。まったくそうだろうと思う。だいふ以前のことであるが、氏の妹さんから深夜私のところに電話がかかってきた。兄のところへ電話をしてもちつとも出ない。心配だから見てきてくれとのこと。私は顔面から血が引くのがわかるくらいにびっくりして、大急ぎで車をひろって駆けつけてみると、電話は故障で何週間も鳴らなかつたこと、減多に電話もかかってこないから、ちつとも気にはならなかつたこと、それよりもこんな深夜に私が血相を変えて飛びこんできたので、夫婦げんかでもして泊めてもらいたくてきたのかと思つたことなど、のんびりした返事が返つてきて、拍子ぬけしたことがある。氏は50歳を越える現在までおおよそ定職というものをもち、若い時から25年以上も家族の一員のように出入りさせて頂いている私にとつても、氏がどのようにして社会の中に生きられるのか、さつぱりわからない。ただ氏の生そのもの、なすこと、語ることのすべてが、私にとつての生きる規準を形成してきたこと。それはいはば父と子というような愛憎の關係の中で必然的に成立してしまつたために、氏を客観的に眺めることなどは不可能であることを、告白しなければならぬだろう。したがって私には氏の仕事や思想を語ることはできないし、このような形での対談も、本来的に決して成立するはずもなかつた。そこで氏の位置については、氏の周囲にいる何人かの優れた友人をして語らせ、私は氏を通してつくられたつたない私自身についてのみ述べさせて頂くことによつて、本稿の責をふさぎたいと思う。

「佐藤が音楽にもとめた純粋性は、結局、詩

とか音楽とか、一見純化された様式を通しては実現されないものであることが、私は自分のことのように理解できるのである。」「ジョン・ケージの思想に、佐藤が影響されたことは疑えないが、ケージの場合よりも佐藤のほうが真摯である。いや、いっそう切実であつたとはいへない。いや、いっそう切実であつた。指標として見失うまいと思う。」「(武満徹)「作曲という仕事には、感性に任かせて感覚的に音を選びとつていく仕方と、音の細部にいたるまでシステムティックに決定していく仕方とがある。どんな作曲家でもこのいわば両極の間のどこかにいるわけだが、システムティックな方法をより好む作曲家の中で、佐藤慶次郎ほど、その方法に徹底している人を僕は他に知らない。彼は、システムといういわゆる合理的な方法を、その極限まで追求して、その結果、遂には、佐藤慶次郎という人間の感性とまさに合一せしめてしまふ。」「(湯浅譲二)「結局、音の世界すらも、彼にとつては限りなく開いてゆかねばならぬ実験フィールドの一つだったのである。しかし、佐藤慶次郎のあらゆる実験が、芸術上の流派とか、ある様式とか、もつとはつきり言つてしまえば、芸術という言葉すら当てはまらないのである。」「佐藤慶次郎の生そのものに、私はあるアイロニーを感じる。ある人間にとつて、彼の周囲や同時代の広い意味での社会的現実に対して、最初からアイロニーをもつて、すなわち厳密に思考する人間のアイロニーをもつて立ち向かう。あらゆる制度や状況に接したとき、彼にはまずその不完全さと不条理が目につく。しかしこういうアイロニーそのものは、その社会的現実が、自分自身の内面や、数学的諸原理と同様、根本的な意味でユートピア的性

質があるという理由で、はじめ、その本来の正当性が与えられるのである。しかし、これは現代に生きるもつとも強くしなやかな精神のため必要な、唯一の手段なのである。」「山口勝弘)

さて、現在の氏は、終日座禅と米国の女流詩人E・ディキンソンの解説三昧に暮らしている。人間のあり方というものは、本来的に人それぞれがその人らしくあるということが最上のものなのであるから、人の能力を比べて云々することは間違っているのであるが、それでも私が絶対的に氏にはかなうべくもないとあきらめていた点は、この三昧、すなわち精神の集中の度合のものすこさである。昔、あの「ピアノのためのカリグラフィ」を作曲しておられた頃、青春の鬱屈をもてあまして私は毎日のように氏の宅へ、文字どおり邪魔をしに通つていたのであつたが、わずか6分半ほどの曲が、4年の歳月をかけて、1音1音刻まれていく様は、物を作るということの意味を、根源から教えてくれたのであつた。ところで今、私はここで氏の方法の一面を、「1音1音刻まれていく」と形容したのであるが、これは私が氏の姿から受けた厳しさの側面を、一つのことばに置き換えたまでで、実際の氏の方法は、1音1音刻むようなものではない。つねづね私が氏から学んでいるものは、物事の実体というか、本質というものは、私が私の目で見てわかるようなものではなく、ましてや、それをことばで表現すれば、それは本質からますます遠ざかるということなのであるが、白状すれば、私にはなかなかこの筋道を悟ることができないのである。そのため、私は氏の前ではただ黙つて、氏のことばと行為の背後にあるものを感じようと